『照葉狂言』の松風、『卯辰山開拓録』の井筒：「日暮の丘」周辺をめぐる一考察

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/36956

金沢大学歴史言語文化学系論集　言語・文学篇
第六号　二〇一四年　一～二〇

『照葉狂言』の松風、『卯辰山開拓録』の井筒
―「日暮の丘」周辺をめぐる一考察―

西村　聡

一　鶯花径から望む毘沙門天上の一本松

泉鏡花作『照葉狂言』（明治二九年（一八九六））では、貢の住む家の二階の東の窓から「峰の松」が望まれるとされる。それはどのあたりの「峰の松」を指すのであろうか。

卯辰山の「峰の松」といえば、一本松が古来名高い。それは宇多須神社本社の高みにあり、山の尾根の岡の上に生えている。森田平次『金沢古蹟志』（明治三六年成る）（注1）は「卯辰山一本松」の項をこのように書き出して、古来金沢近辺で名木とするゆえんを、藩政期における義経の笈掛け松伝承（注2）との関係で解説している。

同書及び社伝よれば（注3）、①宇多須神社は養老二年（七一八）、卯辰村字一本松（現在の卯辰町）に卯辰治田多門天社として創建された。②その後、現在地（東山一丁目）に藩祖前田利家を祀る際、二代藩主利長は守山（高岡市）の物部八幡宮と阿尾（氷見市）の榊葉神明宮を遷座・合祀し、卯辰八幡宮を建立した。③さらに、卯辰八幡宮は明治六年に尾山神社に移転し、同一一年、その跡地に氏子一同は卯辰山の社殿を造営した。これを「前の社」、卯辰山の社を「奥の社」と呼びなし、同三四年に宇多須神社と改称したという。

卯辰山の一本松が生えている宇多須神社本社の高みとは、この「奥の社」の高みを指している。「奥の社」は古く毘沙門天とも呼ばれ、たとえば石川県立歴史博物館蔵「安政頃金沢町絵図」（注4）には、毘沙門天裏から一本松に至る山の道が描かれている。泉鏡花作『夫人利生記』（大正一三年（一九二四））では赤門寺（全性寺）の寺続きに明星の岳の毘沙門天が望まれるとされ、同じく『鶯花径』（明治三一年）・『時雨の姿』（大正六年）などで鬼子母神様の御寺（真成寺）から一本松が望まれるとされるのは、現在の東山二丁目から毘沙門天や一本松を見ていることになる。

「安政頃金沢町絵図」にはまた、毘沙門天を通らずに、宗龍寺の南をまっすぐ一本松の下に至る道が描かれている。「奥の社」の南に位置する現在の卯辰山工芸工房から山に上がる道のようである。現

在はさらに南の矢ノ根川沿いに卯辰山工芸工房に至る道があり、同絵図にも矢ノ根川の流れが描かれている。矢ノ根川は多門天（右岸）と八幡宮（左岸）の間を流れ、明治期の愛宕町（東新地）を経て浅野川に合流する。

宇多須神社改称後の明治三八年に作成された「金沢市街図」（金沢市立玉川図書館蔵）（注5）には、左岸に宇多須神社と記し、右岸の山裾に接する市街地には鶯町と記している。右岸の同じ地域を、明治二一年の「一万分の一地形図」（金沢市立玉川図書館及び金沢大学蔵）（注6）には鶯谷、明治九年の「加賀金沢細見図」（金沢市立玉川図書館蔵）（注7）にはウクヒス丁と記している。現在の鶯町は宇多須神社の上手、矢ノ根川の左岸（右岸は卯辰町）に限られるが、明治期の地名は鶯の名所とされる矢ノ根川の幽谷を抜けたあたりを指したようである（注8）。

泉鏡花作『鶯花径』では、「愛宕の一本松」の下の窪地を「鶯谿」と称していて、これは同年作の『五本松』でもその根を土蜘蛛の蟠ったようなと、同じ形容を使用する愛宕山宝泉寺の五本松（鶯町の南、子来町に現存する）を想起させるが、『鶯花径』や『雪柳』（昭和一二年〈一九三七〉）でその炎上を描くのは、『金沢古蹟志』の「卯辰山一本松」の項の終わりに、

実にも当地辺にて高名なる松なりしかど、明治廿三年の春二月廿三日、遊人の狂客の為に燃出し、一時消し留むるといへども再び焼出で、遂に焼亡し、三日三夜許にて火漸く消えたり。今僅に根株残れるのみ。実に遺憾といふべし。

と記される、「奥の社」の高みにある卯辰山の一本松の焼失が重ねられていると見られ、小林弘子「『鶯花径』――〝松〟に込められた母恋のけじめ――」（『鏡花研究』一〇、二〇〇二年三月）に、鏡花作品中の卯辰山の松の用例を整理して指摘するとおり、「一本松と五本松各々の特色を生かし、作中の「一本松」へと合成していった」と考えられる。

小林論文ではまた、卯辰山の一本松や愛宕山の五本松とは別に、『照葉狂言』（明治二九年）に描く「峰の松」を取り上げ、『小春の狐』（大正一三年）に、

やがて皆、谷々、峰々に散つて蕈を求つた。かよわい其の人の、一人、毛氈に端坐して、城の見ゆる町を遙に、開いた丘に、少しのぼせて、羽織を脱いで、蒔絵の重に片袖を掛けて、ほつと憩らつたのを見て、少年は谷に下りた。が、何を秘さう。その人のいま居る背後に、一本の松は、我がなき母の塚であつた。

（三）（以下、鏡花作品の引用は岩波書店版『鏡花全集』により、振り仮名は省略し、適宜私に傍線を施す。）

とある「一本（ひともと）の松」が、『照葉狂言』の「峰の松」や帰厚坂近くの句碑に刻まれた鏡花の俳句、「はゝこひし夕山桜峰の松」（注9）の「峰の松」と同じ松と見なされている。

傍線部については、『一之巻』（明治二九年）にも、

…其麗かさに引替へて、ひとむら樹立松杉の鬱蒼として生茂れる、あゝ墓原の春寒さよ。唯見れば母の墳墓の、誰が悪戯にや傍らなる松の根に倒されて、台石ばかり残りたり。（「墓参」）

とあり、また、

…町人が遊山の場とは、別に隔ての垣もなく、松杉の其の樹立にて、境をなせるに過ぎざれば、わるあがきする里の児、酔漢などの侵し入りて、墓石をおしこかし、印の小松の枝をなぎ、卒塔婆を抜き棄てなどするが、墓あらしとて数々あり。（同前）

とあるから、恐らく実際鏡花にも、母の墳墓の傍らに生える松は墓標のように慕われたのであろう。ただし、その「一本の松」は、松や杉の生い茂る鬱蒼とした墓原に紛れていた。もちろん、作品と実際が同じである必要はないが、鏡花の母鈴は明治一五年に没して円祐寺に埋葬された後、卯辰山の墓地に改葬され、墓地が市有公園に改修される明治四三年より前には、その墓地に眠っていた（注10）。場所は現在の望湖台の一角とされる（注11）。絵地図に描かれる毘沙門天の一本松からはやや南に離れているし、木立に紛れた「印の小松」程度では市中から遠望できるわけでもない。「一本の松」は兀山に屹立する毘沙門天の一本松とは本来別の松である。

しかし、毘沙門天の一本松は母の没後八年で炎上して、これまで言及した鏡花諸作品の執筆時には、毘沙門天の一本松自体がすでに失われて、面影を慕うしかない存在となっていた。もともと遠望のきかない墓標の「一本の松」を、毘沙門天の一本松を目印にその右手の木立と見当を付けていたのが、毘沙門天の一本松の焼失により、両者を区別することに意味が薄れたということであろうか、田中励儀「『雪柳』考――一本松の形象をめぐって」（『泉鏡花文学の成立』〈双文社、一九九七年一一月〉所収）では、『雪柳』（昭和一二年〈一九三七〉）を論ずる視点として前者に注目し、『照葉狂言』・『鶯花径』・『小春の狐』の例を引いて、「鏡花作品における卯辰山一本松は、亡き母の象徴として形象され、主人公の少年にその懐かしい姿を想起させ、まのあたりに実在化させる契機となっているのである。」とまとめている。

その後、新日本古典文学大系明治編20『泉鏡花集』（岩波書店、二〇〇二年三月）の『照葉狂言』補注一二・一三・一五に、鏡花作品中の「峰の松」及び卯辰山の用例を列挙して、どれもが同じ卯辰山の一本松（名所の一本松）であるかに読める解説がなされているのも、卯辰山の一本松が母恋いの象徴であるとする田中論文以来の見方が定着していることを物語る。一方、前掲小林論文では、『小春の狐』の「一本の松」を毘沙門天の一本松とは区別し、『照葉狂言』の「峰の松」とは同じ松と見ている。

卯辰山は全体として「聖域・「母」の在所」（注12）と呼ぶのがふさわしいであろう。そこに上るのは、「我がなき母の塚」に参ることを意味する。『一之巻』の第一章は「墓参」と題されている。しかし、『照葉狂言』で「峰の松」の在りかに上る貢の行動は、峰の墓に眠る母を慕って起こされたのか。むしろ、

明治初期の卯辰山の写真を見ると、幕末の急な開発のせいか、山肌に樹木はまばらで、松がとりわけて目立つ。卯辰山の「一本松」が指標となる必然性がここにあると考えられる。（新大系補注一三）

といわれるとおり、「峰の松」は貢の「指標」と位置づけられる。墓

標の松を貢が慕うのであるとは思われない。しかし、写真に写る毘沙門天の一本松が、果たして『照葉狂言』の「峰の松」であるかといえば、その経路や景物は両者で異なると見られる。これら三種の「峰の松」の区別は、『照葉狂言』の作品理解に影響が及ぶ問題であると考える。

二　天神橋から上る卯辰山開拓の峰の松

『照葉狂言』の「峰の松」はどこにあるのか。まずは、作品中でどう描かれているかを整理しておきたい。

A　日は春日山の巓よりのぼりて粟ケ崎の沖に入る。海は西の方に路程一里半隔りたり。山は近く、二階なる東の窓に、彼の木戸の際なる青楓の繁りたるに蔽はれて、峰の松のみ見えたり。欄に倚りて伸上れば半腹なる尼の庵も見ゆ。卯辰山、霞が峰、日暮の丘、一帯波の如く連りたり。（「仙冠者」一）

B　衣ずれの音立てて、手をあげてぞ指さし問ひたる。霞ケ峰の半腹に薄き煙めぐりたり。頂の松一本、濃く黒き影あざやかに、左に傾きて枝垂れたり。頂の兀げたるあたり、土の色も白く見ゆ。雑木ある処だんだらに隈をなして、山の腰遠く瓦屋根の上にて隠れ、二町越えて、流の音もす。（「夜の辻」一）

C　ふる里の空のなつかしきは、峰の松の左に傾きて枝を垂れたる姿なり。（「仮小屋」二）

D　星は降る如し。あなやと見れば、対岸なる山の腰に一ツ消えて、峰の松の姿見えつ。われは流に沿うたりき。（「峰の堂」一）

E　渡り越せば、仮小屋とハヤ川一ツ隔たりたり。麓路は堤防とならびて、小家四五軒、蒼白きこの夜の色に、氷のなかに凍てたるが、透せば見ゆるにさも似たり。月は峰の松の後になりぬ。

　坂道にのぼりかけつ。頂にいたりて超然として一眸のもとに瞰下さば、わが心高きに居て、ものよく決むるを得べしと思ひて、峰にのぼらむとしたるなり。（「峰の堂」二）

F　身を起こして、坂また少しく攀ぢ、石段三十五階にして、彼の峰の松のある処、日暮の丘の上にぞ到れる。

　松には注連縄張りたり。香を焚く箱置きて、地の上に円き莚敷きつ。傍らに堂のふりたるあり。廻廊の右左稲かけて低く垣結ひたる、月は今其裏になりぬ。（「峰の堂」二）

　貢の家の二階にある東の窓からは、繁る青楓に蔽われて「峰の松」しか見えないが、欄干を支えに伸び上がって見ると、半腹の尼の庵も見え、卯辰山・霞が峰・日暮の丘の連なりも視野に入る。

「半腹の尼の庵」は、『新編泉鏡花集』第一巻（岩波書店、二〇〇三年）の作中地名索引に、

清心庵（あまでら）（「清心庵」）「清心庵」の舞台．天保年間（1830-44）の「金府大絵図」には，卯辰山の浅野川よりの山麓に「尼寺」が記されている．明治20年代，清心という老比丘尼が卯辰山に住んでいた．この「尼寺」に住んでいたものかどうかは不明．

とされる「尼寺」を指すと思われる（注13）。「金府大絵図」（注14）で

見ると、観音院のある観音山の南麓、帰厚坂の上り口付近に「尼寺」の文字が記され、観音山を含む卯辰山の峰々には大きな松らしい木が何本も描かれる。その中で松の木がひときわ大きく描かれ、「一本松」の文字が記される峰は、少なくとも観音山との間にもう一峰（望湖台付近）を隔てている。また、観音山の奥（浅野川の上流沿い）には、やはり大きな松らしい木の生える峰々が描かれる。毘沙門天の一本松や望湖台からは、眼下に東山の寺々・家々や、遙かに河北潟が望めるのに対して、観音山の奥の峰々からは、医王山・白山方面に展望が開ける。

仮小屋を出た貢が歩むのは、毘沙門天の一本松への〝鶯花径〟ではなく、川の「流れに沿う」て、柳の木が並ぶ岸の道であり、そこから対岸に「峰の松」が見えている（D）。貢は橋を渡り越して「峰の松」に至る坂道を上る（E）。坂道の曲がり角に「艶子之墓」があり、その上の石段三十五階を上り詰めたところが、「彼の峰の松のある処、日暮の丘の上」であるという（F）。確かに今日でも、浅野川にかかる天神橋を渡り、帰厚坂を菖蒲園まで上って、右折して千杵坂の石段を三十五段、上り詰めると、「日暮ケ丘」の標柱が立てられてある。明治三〇年作の『清心庵』の表現を借りて想像すれば、日が暮れても夕日の余波を受けて明るく、眺望を長時間楽しめる丘の意を込めたようである。

このあたりの峰の開拓については、『由縁の女』（大正八年）にも、

其がね、寺にないんだよ、向山、城と向合つた山だから向山さ。私たちの町から、麻野川と云ふ川を越すと、それから上りに成る。海、湖、城下も一目の見晴しで、随分景色の好い処だが、其処の、丘、谷、山懐、松林の中なんぞ、山寺も二三ケ寺あつて、其処等中が墓地に成つてる。峰には月天子の堂があります。冷い良い水の湧く処で、其の傍の小高い処に、親たちの墓があるんだがね。（「出達。故郷の山」一）

其の山は、前に一度、矢張り市の有志の思ひ附で、開発とか称へて、峰を開いて、家を建てる、樹を植ゑる、池を穿る、芝居を拵へる。茶屋料理屋が出来て、祭礼のやうに賑つたものだから、町で見ると、雲の上へ喜見城が湧いたと騒いでね、（中略）

其も唯、一春夏――一體が雨の多い国だから、降ると成ると辷つて山坂は難渋で、最う其だけでも寂れます。処へ名代の雪国だ、冬は話にも成りますまい、殷賑は三年とは続かないで、拡げた道は崩れるし、開いた崕は穴に成つて、最う私たちが小児の頃には、（中略）城址とさへ言ふものを、芝居や料理屋などは影もない。其の時出来た見晴しの、（日暮しの丘。）とか言ふ、草の蓬々と生えた中に、立腐れに残つた小屋が一つ。（中略）

山の中腹に天満宮の社がある。拝殿、額堂、境内の白梅紅梅は因より、お宮の外廻りに桜の樹が多いから、其の当時の山開は、此の辺を見当てにしたものらしい。家はなくなつても、松は枯れず、桜は栄えて、一重の咲く頃は、枝の花の中から、紫の医王山が見え、遙に聳えて雪の白山が眺められようと言ふ処でね。（「出達。故郷の山」二）

と、麻川礼吉が細君にする夜語りの中で回顧されている。引用した

のは開拓の一度目とその後を語る部分であり、二度目の今度は市の有志家の発議で、礼吉の親たちの墓があり、墓地のある峰を開いて、「一列一體に公園にしよう」、そのために「一山の墓を余さず取払ふ事に成つた」。それが市役所の名義で土地の新聞に広告が出たと、故郷の従姉妹から知らせが来て、『由縁の女』の物語が始まる。

引用した一度目の開拓は「日暮しの丘」やその上にある「天満宮」の一帯（及び谷を挟んだ峰の養生所等の設置）が主な対象となり、そこは「山の中腹」であったが、二度目は「峰まで飛上つて」、峰の墓地を公園にする計画であるというから、この点でも、『照葉狂言』の貢が目指した「日暮の丘の上の峰の松」と、鏡花の母の墓の傍らに生える「一本の松」とは別の松であることになる。

また、『由縁の女』の引用部分に「峰には月天子の堂があります。」とあるのは、一度目の開拓の折、庚申塚の土中から出現した日月天子を祀る善妙寺（注15）を指すと思われる。『ゆかりのおんな櫛笥集』口絵「篇中仮構地図」（小村雪岱画）及び鏡花自筆の下絵（注16）を見ると、一番奥に「向山」、手前の左に「墓地」、右に「峯の堂」、「峯の堂」の右下に「天満宮」の文字が記されている（下絵では左から右へ「卯辰山」、「墓地」、「峯の堂」、その奥に「墓」の文字が記されている）。逆に『照葉狂言』の「峰の堂」は「日暮の丘」にあり、「天満宮」の下に「峰の堂」が位置することになる。それゆえ、両作品の「峰の堂」を同じ「峰の堂」とは見なせないが、実際の日暮の丘にそれらしい堂が存在した事実は確認できず、『由縁の女』の方が実際に即していて、『照葉狂言』の場合は「月天子の堂」を借りて、「天満宮」の上から下へ下ろした「仮構」といえるかも知れない。

二度目の開拓、共同墓地から市有公園への改修は、前述のとおり明治四三年に始まる。一度目も含む卯辰山開拓の経緯を、従来、『加能郷土辞彙』（昭和一七年跋）が参照されてきたが、ここには『由縁の女』発表の三年前に刊行された『稿本金沢市史市街編第一』（金沢市、大正五年六月）から、要所を抜き出しておきたい（割注の皇紀等は省略する）。

…山中に小名多し、山上の北方は河北郡小坂村字卯辰・字山ノ上・字談議所に属し、之を小名として春日山といひ、西麓観音町一丁目の高を観音山といひ、子来町宝泉坊の地辺を摩利支天山といひ、高道新町の高を油木山といひ、旧一本松の地辺を毘沙門山といひ、春日山最も著はる、又山中に天然台・庚申塚・鳶ケ峰・一本木・三本木・勘兵衛塚等の字地あり、鳶ケ峰最も著はる、闔山赤土にして樹木矮少なれども、近年植林を計画し、多く松・杉・檜・鶏冠木の類を植ゑたり、渓水甚だ乏く、唯山汗の聚まるもの纔に滴るのみ、山上は湖山の景矚に富み、形勝の地なり、（中略）慶応三年藩は山上を開拓せんことを謀り、高を鏟り低を埋めて、養生所・撫育所及び集学所等を起し、卯辰神社を建て、招魂社を起し、山麓に諸工場を設け、山中に道路を開き民屋を建て、（中略）大小五条の登路を作り、常盤町の東北頭より登り、卯辰神社に至るを帰厚坂と称へたり、明年開拓の工を中廃したりしより、年毎に荒廃に帰し、明治六年山上一万坪を劃し、金沢町共同墓地となし、益ゝ閑寂の境に復せり、

（中略）明治四十三年市は山上を拓きて公園となすの計画を樹て、明年より大正元年に亙り、墓地移転等を行ひ、二年以降連に改修を加へて公園となし、大正四年市は御即位の大礼記念事業として、帰厚坂を改修せんことを図り、同年度及び五年度に亙り、其工を起せり、

この記述により、一度目の開拓が慶応三年（一八六七）、加賀藩の最末期に行われ（『由縁の女』の引用部分には「市の有志の思ひ附」とされる）、早くも翌年には事業が中断して年々に荒廃が進み、明治六年には山上の一万坪が共同墓地となったと知られる。鏡花が生まれたのはその明治六年であり、同一五年に母鈴が亡くなり、二三年に毘沙門天の一本松が焼失したことは前に述べた。この間の明治三年の「金沢市街図」（金沢市立玉川図書館蔵）（注17）や前掲・明治九年の「加賀金沢細見図」を見ると、毘沙門天の一本松はもちろん健在であり、そこに至る鶯町付近からのまっすぐな道が描かれ、それとは別に浅野川に沿う峰を開いて石段の道を通し、卯辰神社（天満宮）と絵馬堂が並ぶ様子も描かれている（注18）。

毘沙門天の一本松を含むこの範囲の地名や社寺、諸施設の位置関係は、『稿本金沢市史』掲載の「慶応三年卯辰山開拓概図」が精細であり、『照葉狂言』の貢が上った道を地図上に重ねてたどることができる。㋑天神橋を渡り、㋺帰厚坂を上って、㋥料理店の手前で右折、㋭千杵坂の石段の上が㋬日暮ケ丘、左折してさらに石段を上ると、㋮卯辰神社と㋯絵馬堂が並ぶ㋰景雲台に到着する。

これらの配置をさらに立体的に把握するには、明治二年刊『卯辰山開拓録』（開拓山人内藤誠斎著、石川児游画。以下、金沢大学日本語学日本文学研究室蔵本による）の挿図が参考になる。本書はすでに、「尼の庵」をめぐる考察の中で取り上げられ、「貢が上る坂は、千杵坂と考えてよい」との結論が得られている（注19）。本稿でも、これまで見てきた種々の観点から、その結論を支持するのが当然であるが、卯辰山開拓のもう一つの文学遺産として、しばらく鏡花作品を離れて、同書の挿図に描かれる「業平ノ井筒」に注目したい。

【『稿本金沢市史』掲載「慶応三年卯辰山開拓概図」】

三　滝ケ丘の名所「業平ノ井筒」とその流転

卯辰山に「業平ノ井筒」があるということは、早くに地元の能楽師の方から聞いていた。不思議な話を聞いても半信半疑で、調べる気持ちになれずにいたが、山森青硯「業平の井筒」（『謳舞往来』一九・二、昭和四一年二月）に接して、関連する資料を集め始めた。山森稿は次のように書き起こされている（引用に際して明かな誤植は訂正した）。

謡曲「井筒」の井筒がどういうものか、わが金沢に現存している。場所は向山卯辰神社の本殿に向って左側に在る。市の説明立札が添えられてあるが、永い風雪に殆んど判読出来ない迄にすり減っていて、ただ業平の井筒とのみ読むことが出来る。筆者がこれを知ったのは明治二年発刊の「卯辰山開拓録（開拓山人著）」を読んでからである。（中略）明治二年の見取図は完膚無き迄に荒れはててい た。（中略）滝ケ丘に来て見ると井筒の箇処と覚しい処に安達幸之助の石碑が建っていた。この変革を全く知らなかった筆者にも罪はあろうが、さしもに殷賑を極めた土地がかく迄に変化したには全く驚かざるを得なかった。開拓録の井筒の場処に空しく立った筆者は、百余段もある赤戸室の石段を昇りつめた処、本殿の左脇に前記井筒を発見したのであった。

一辺が一mにも満たぬ、撫肩の井筒、青苔、星霜幾百年、成程大和在原寺の面影を一片にとどめている。筆者は薄紅葉の八汐枝をこじ分けてそっと井筒を覗いた。中は黄櫨落葉が一ぱいつまっていた。井筒の中はどうでもよい。この井筒がどうして遠隔の地金沢に移ったかを探究せねばならぬ。以下開拓録と諸書によって考察して見よう。

山森稿にも考察のよりどころとする『卯辰山開拓録』は、その端作題の下に「慶応三卯六月より翌明治元年辰十二月迄の事を記す」とあり、「卯辰神社之巻」と「養生所并新町建之巻」の両巻から成る。慶応二年に家督を相続した加賀藩第十四代藩主前田慶寧は、翌三年に卯辰山を開拓して養生所の設置、天満宮の遷座、撫育所の移転、招魂社の造営を行った。その経過は『加賀藩史料藩末篇下巻』（昭和五五年一〇月の復刻版（清文堂出版）による）所引の各資料によって具体的に把握できる。

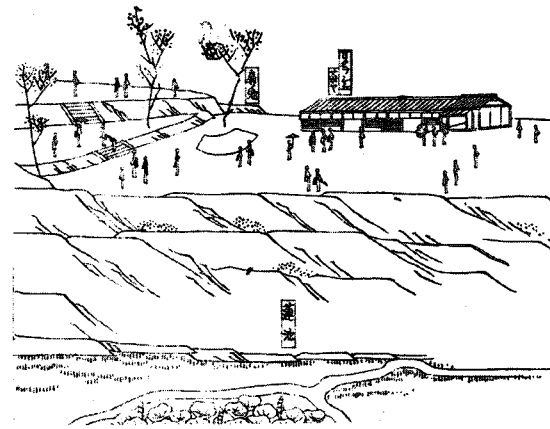
たとえば『由縁の女』に「殷賑は三年とは続かないで」とあり、『稿本金沢市史』にも「年毎に荒廃に帰し」とあったことが、『加賀藩史料』明治四年六月一三日条所引「御手留」の記事により芝居小屋（前掲「概図」㋐）に渡世していた者の生活のため、客寄せに花火を営むことが許されたほどの衰微から裏付けられる（注20）。旧藩の事業が維新後に継承されず中断したのは、廃藩置県に向かう時代の趨勢でもあろう。開拓直後の明治二年に刊行された『卯辰山開拓録』には、衰微の予感は交えず、その跋（石川児游）に「昔ハ寂寞の境も今ハ繁華の地となり」と記し、むしろ第二編を著者に促す言葉が表明されている。結果的に第二編は実現しなかったが、卯辰山開拓の責任者（注21）の手に成る本書は、『加賀藩史料』での依拠の頻度、あるいは『稿本金沢市史』が序跋や挿図を除いて本書の大部分を掲

載する事実から見ても、卯辰山開拓史の基本資料と評してよいと思われる。本書両巻の内、従来は「養生所井新町建之巻」の方を利用して、開拓のねらいや意義が論評されてきた（注22）。本稿では主に「卯辰神社之巻」に目を向けて、序にいう「一名区」の変遷を追跡することになる。

さて、山森稿には、「業平ノ井筒」は卯辰神社の本殿左側にあり、そのいわれを説明する立て札の文字は判読不能とされている。現在、卯辰山三社（卯辰神社・豊国神社・愛宕神社）の境内左側には件の井筒の石組みが残り、その傍らに金沢市観光協会名で、次のような文章を書いた立て札が設置されている。

謡曲「井筒」による／「業平の井筒」はこの井戸である／大和の国　在原寺にあるべき「井筒」であるが／故あって　慶応三年　卯辰山開拓の折　この地に移されたものである／明治初年「滝邸」に在ったが　その後　現在地に移された　井筒の説明碑「滝邸井欄碑」が付いていたが　今は所在不明です

まず、「滝邸井欄碑」は「滝邸井欄碑」の誤りであろう。「業平の井筒」は滝氏の邸宅ではなく、千杵坂を左折して上る三ノ坂の上に開けた滝ケ丘（前掲「概図」⑨）にあった。『卯辰山開拓録』ではその滝ケ丘の右端に石組みの井筒が描かれ、「業平ノ井筒」の文字が記されている。井筒を見に来た見物人も二人いて、名所化している様子がうかがわれる。日暮ケ丘は三ノ坂下の「千杵坂の高出先の丘」にあり、休み茶屋や扇面の池が設けられていて、ここにも漫歩する人々が多く描かれ、眺望を楽しむ風情と見える。『由縁の女』の前掲部分



【『卯辰山開拓録』五丁裏】

にも「其の時出来た見晴しの、（日暮しの丘。）とか言ふ」とあった。

滝ケ丘の上は二ノ坂、手洗いの泉が涌き出る咸泉ケ丘を経て一ノ坂に続く。二つの坂を合わせて開基坂ともいい、その由来を『卯辰山開拓録』は、

開基坂と云御宮地一山むかしは茶臼山鳶ケ峯とて険阻の山なりしを慶応年間草創の時この山を二段に切開き此坂二段の境にて拾間余り切落せるところなり開拓手はしめの場所なれハ開基坂の名ありと云

と説いている。開基坂の上の景雲台に天満宮が鎮座する。竹沢鎮守

からの神幸は慶応三年一一月二三日、七日間の慶賀祭には数万人が群集したといい（注23）、翌明治元年に卯辰神社の号が勅許された（以上、『卯辰山開拓録』「御本社」の項）。やがて観音山にあった山王社が豊国神社と改称され、愛宕神社（愛宕山明王院）を合祀して、一時市中の殿町に移転した後、明治四〇年に現在地に遷座し、以来、景雲台には三社が並ぶことになった（注24）。その景雲台は、『卯辰山開拓録』に、

此地むかしは鳶か峰の絶頂にして頂上別に小山あり茶臼山又謙信台とも云上杉謙信此ところに陣を取り床几をかけしところと云伝ふ今御本社建物の所これなり

と記し、前掲部分と合わせて読むと、開基坂から景雲台にかけての峰を鳶ケ峰と呼んだことが分かる。『照葉狂言』に「日暮の丘」に連なる峰を「霞が峰」と称するのは、この鳶ケ峰をそう呼び替えたと考えられる。実際に即し過ぎては、貢が到達した「日暮の丘」には、「峰の堂」ならぬ休み茶屋の旧跡を見ることになる。それでは貢の心も落ち着かず、懐かしい故郷の空の指標たり得ない。

日暮ケ丘の一段上、滝ケ丘にあった「業平ノ井筒」については、『卯辰山開拓録』は挿図上に位置を示すことはしても（七丁裏）、項目を立てて説明を加えることはしていない。その代わりに、石組みの井筒を覗く幼い男女の図と、高林景寛の歌「筒ゐつゝ井筒にたてる梅柳千年の春のかけそ移れる」を記載している（七丁表）。これは七丁裏に描かれる見物の二人やその他の場所の参詣客・通行人たちとは異なり、ここだけ『伊勢物語』二三段の物語世界を、また説明の文章ではなく絵で想起させるようである。

山森稿には井筒を覗く二人を「二人の小袖女人」と見ている。その理由は分からない。もう一点、「開拓録文を次に再写して見よう」として引用する「滝邱井欄碑」の文章（明治二年、中井順撰）が、『卯辰山開拓録』のどの丁にも見当たらないことが不審である。

ただし、『稿本金沢市史』には「卯辰山」の節の「参考」資料として『卯辰山開拓録』の序跋と挿図を除くほぼ全文（注25）を記載している。『卯辰山開拓録』六丁裏の最後の行（〇御手洗）と九丁表の最初の行（〇咸泉ケ丘）の間の七丁・八丁は、前述のとおり、井筒の

【『卯辰山開拓録』七丁表】

図と景寛の歌、滝ケ丘・開基坂の図、それらを詠んだ桜顚女の歌二首が刷られている。ちょうどその二丁分を『稿本金沢市史』では削り、「業平の井筒」の項を設けて「滝丘井欄碑」の文章を挿入した形になっている。碑文は本来碑に刻まれてあり、『卯辰山開拓録』への挿入は『稿本金沢市史』による再構成であると思われる。

『卯辰山開拓録』の挿図は、よく見ると井筒の傍らに石塔を描いている。真上に「業平ノ井筒」の文字が記されていて、頭のとがったこの石塔が「井欄碑」であるらしい。碑は失われて、碑文は『稿本金沢市史』に残った。山森稿が『卯辰山開拓録』に記載するという理由は分からないが、山森稿及び『稿本金沢市史』に引く漢文体の碑文に改めて注目すると、大略次のようなことが書かれている。

――慶応三年の秋、卯辰山に天満宮（菅公祠）が造営されると、人々はその神前の地に争って奇木怪石を配列した。滝ケ丘にある井筒は数百年の故物と見られる。かつて大和の在原寺にあり、豪商が購入して後、三四の流転を経て加賀の地にもたらされた。当国では斎藤某が入手して茶井の上に置き（注27）、やがて再び流転して富商木谷藤右衛門の所蔵に帰した。木谷は私物化するより神前に奉納して永く伝存することを願い、中井らが碑を建てて由来を記した。

木谷の奉納に関しては、山森稿に引く杉原臥月「井筒の井筒」（『能楽時報』二三、大正二年二月）に、口碑に伝えるところとして、木孫（下堤町、木屋孫太郎）（注28）の茶庭にあった井筒を、加賀藩主前田斉泰正室帰国の時、旗下接待の不調法を咎められ、その後も変事が続いて家相を占ってもらうと、不吉の因は井筒にありとされて、卯辰山開拓の折から神前に奉納したと記されている（注29）。

碑文にいう「奇木怪石」を代表するのが、大宰府から移植した「御渡飛梅」と「業平ノ井筒」であることは、『卯辰山開拓録』でも特に挿図と歌を添える扱いにうかがえる。ところで『伊勢物語』二三段の井筒が石作りであったかといえば、物語自体には何の言及もなく、羽衣国際大学日本文化研究所編『伊勢物語絵巻絵本大成資料編』（角川学芸出版、二〇〇七年九月）及び山本登朗編『伊勢物語版本集成』（竹林舎、二〇一一年一〇月）所載の範囲で探索しても、中尾家本伊勢物語絵本に材質不明の円筒を描く以外は、どれも「井」の字に板を組ん

【『卯辰山開拓録』七丁裏】

だ形をしている。能の〈井筒〉に「庭の板井を掬び上げ」とあり、かつ井桁の作り物を舞台に出すことの影響と考えられる（注30）。

田舎わたらいする人の子供が大和のどこに住んだか、『伊勢物語』は明示せず、『大和物語』一四九段は葛城郡としたが、『伊勢物語』の冷泉家流古注では奈良の春日の里と解し、能の〈井筒〉では石上の在原寺がその旧跡とする。在原寺は早くから名所化していたらしく（注31）、能の〈井筒〉以後、その材質や形状は不詳ながら、ゆかりの井筒が在原寺参詣の象徴的景物となる。

在原寺の井筒については、三条西公枝の『吉野詣記』（天文二二（一五五三））をはじめとして、近世の旅行記や地誌類に記載があり（注32）、たとえば延宝三年（一六七五）序『南都名所集』には、

石上在原山本光明寺は、本尊は十一面観音なり。在原の業平の旧跡なり。（『日本名所風俗図会9奈良の巻』（角川書店、一九八四年一月）による。）

として、参詣の武士が板井を覗く図を描き、また、

むかしの井、今にありとぞ。また一むらすすきといへるも、この寺の辺に有るなり。

として、武士の後ろに「一むらすすき」を描いている。これも〈井筒〉の詞章に「ひと叢薄の穂に出づるは」とあることにより、舞台に出す井筒の作り物に薄を添える演出の影響に違いない。

このほか、延宝九年刊『和州旧跡幽考（大和名所記）』に、

…老にけらしなどゝたはぶれ給ひし井筒の跡かすかに夜半にや君がひとり越らんと詠ぜられし千栽とて薄など生たり（『続々群書類従』第八所収。明治三九年版による。）

とあり、これは『伊勢物語』の中に薄の根拠を見いだそうとするようであるが、建部綾足の『折々草』（明和八年（一七七一）成る）には、

…旅人に見するとて、堂の後に古井の侍るを、これは業平朝臣の童男にておはしけるとき、「筒井づゝ井づゝにかけし」とよみ給へる井のもと也といひ立たり。又かたはらにひともとのすゝきをうゑおきて、是は井筒とふ謡物に「ひともと薄の穂に出るもいつの名残りなりけむ」とある跡也とてみす。（新日本古典文学大系『本朝水滸伝　紀行　三野日記　折々草』（岩波書店、一九九二年一〇月）による。）

とあり、旧跡観光の演出として薄を植えたことを寺側が認めていたと知られる。

こうして大和の在原寺（石上寺）の井筒は能に由来する板井であり、卯辰山の「業平ノ井筒」のような石作りではなかったらしい。それでは、「井欄碑」文にいう当国斎藤某入手以前の、豪商が入手した石作りの井筒はどこを流転していたのか。明治二八年成立の著者不詳『浪華百事談』巻之二に記載する次の伝承と関係があるかに思われる。

○業平井筒

同書に、島の内御津八幡宮の辺りの隠宅に井筒ありて、是和州在原寺の井筒なる由、中古伊丹の郷に稲寺屋某とて富る人あり。家宅は勿論庭前の樹木に至るまで風流を好み、頻りに珍石奇樹をあつめるに、其頃大和国在原寺の僧に約して、彼寺内なる井

筒を白銀四百枚〔割註〕壱本には白銀八百枚と有。」に換へて、稲寺屋の庭中に移す。是を聞て心ある人は眉をしはめて誹りたり。程なく稲寺屋は不如意となり、家宅も売却し、井筒はくさむらに残りたり。其後ち三十余年も誰とふ人もなく、空しく打捨ありしを、豊竹越前、是をのぞみて、黄金廿両に換へ島之内八幡すぢの隠宅に移す。程なく此宅も亡びて、又もや井筒のみ残れり。惜むべし。稲寺屋なかりせば、此井づゝ在原寺にとゞまりて、人の賞すべきに、白銀黄金の媒ちに、むなしく芳名を失ひ、塵芥に埋れしは、実に双袖をひたすに堪たりと記す。南水漫遊のうちにも此こと記すと雖も、八幡すぢの何地にありしや詳ならず。（『日本随筆大成』新装版第三期第二巻（吉川弘文館、一九九五年六月）による。）

冒頭に「同書」とあるのは浜松謌国『摂陽落穂集』（文化五年（一八〇八）序）のこと、また同じく『南水漫遊』（文政三年（一八二〇）以降成る）の著者、颯々堂南水の号であり、『浪華百事談』の著者は『摂陽落穂集』（『新燕石十種』第八巻所収）に拠りつつ、『南水漫遊』（『新群書類従』第二所収）をも参照していることになる（『摂陽落穂集』のみが「伊勢物語の草紙」を引用する）。

その内容は、伊丹の稲寺屋という富裕の人が、在原寺の井筒を大金で購入して庭に移設したところ、やがて不如意となり家宅を売却、井筒は草むらにうち捨てられて三十余年が経過した。それを（浄瑠璃太夫の）豊竹越前少掾（一六八一～一七六四）がやはり大金で購入して、島之内御津八幡宮辺の隠宅に移設したが、この隠宅も亡びて又もや井筒だけが残された。という内容であり、稲寺屋が頻りに「珍石奇樹」を集めたとされること、大金で購うには板井より石作りの井筒が値打ちと見られること、うち捨てられても朽ちないことなどから、同じく在原寺の井筒といっても、在原寺で名所化していた板井とは別物であり、稲寺屋が購入した井筒は石作りの井筒であったと考えられる（注33）。

豊竹越前所有以後の井筒は、八幡筋のどのあたりに伝存したのか、『南水漫遊』を参照してもつまびらかにしないとある。『浪華百事談』の明治半ばにも行方知れずということであろう。石作りの井筒は朽ちずに流転を繰り返して付加価値を増し、もしやその果てに加賀の豪商の手に落ちたのかも知れない。くだんの「井欄碑」文には伝説の続編を読む趣きが感じられる。

四　峰の堂に吹く静かな松風、清らかな謡の声

峰に上る貢が川を渡る橋は、『ゆかりのおんな櫛笥集』口絵「篇中仮構地図」（小村雪岱画）にその名を明記する天神橋を想起させる。鏡花自筆の下絵には橋の名を記さず、「らんかんつき」の文字が書かれている。明治二七年作の『義血侠血』に、

河は長く流れて、向山の松風静に度る処、天神橋の欄干に靠れて、うと〳〵と交睫む漢子あり。（三）

とあり、『照葉狂言』に、

長き橋の欄干低く眺めらる。板の色白く、てら〳〵と対なる岸

に懸りたり。」（「峰の堂」一）

とあるのも、この天神橋の欄干をいうと見られる。そこは傍線部のように向山（卯辰山の異称）の松風が静かに吹き渡る所とされる。

天神橋は卯辰山の開拓に際して架けられ、天神橋から帰厚坂を上る道は表往来と呼ばれた（注34）。新名所の賑わいは、山麓の錦絵工場で出版された「卯辰山開拓図絵」（石川県立図書館蔵）にうかがわれる。「図絵」は新しい時代の到来を、「冬かれし草木もいまはよみかへる橋の名しるきみよの春かな」の歌と、「甦橋」（天神橋の異称）を渡る馬上の洋装とで祝福するかに見え、その季節感と橋を行き交う人々が、一帯の華やぐ印象を与える。凧の揚がる空の遠景には、いかにも開拓地らしく平らに造成された丘とそこに並ぶ建物の屋根が描かれる。

しかし、帰厚坂を上る表往来の賑わいは、鏡花の生まれる前にすでに失われている。『義血侠血』には、宵の河原には露天が熱鬧を極め、見世物小屋の板囲いが並ぶとされるから、天神橋自体の賑わいは変わらないにしても（注35）、人々が群れるのは河原であって、山の天神ではない。それに貢が渡る今は、欄干に枕して露店の娘たちが眠る夜更けでもある。貢はその「橋」を、橋の袂まで来て、「ついでなればと思ひて」渡った。

『照葉狂言』には天神橋の名は使用されない。天神橋を渡ると書けば、貢は天神（天満宮卯辰神社）を目指すことになる。貢は天神の峰には上ったが天神には至らず、半腹の日暮の丘にとどまって、その山の端で覚悟を決める。日暮の丘にある「峰の松」が、貢を導く

【『卯辰山開拓録』三丁裏・四丁表】

結果となったのであり、まっすぐ天神に救いを求めに行こうとはしていない。貢は夜半の道を歩みながらも、小親から離れること以上の意味は、自分の行動に見いだしかねている。

ア …心太く惑ひて脳の苦しきが、孰れか是なる、孰れか非なる。わが小親を売りて養子の手より姉上を救ひ参らせむか、はた姉上をさし置きて、小親とともに世を楽しく送らむか。いづれか是なる、いづれか非なる。あはれわれ此間に処していかにせむと、手を拱きて歩行くなりき。

しづかに考へ決むとて、ふら〳〵と仮小屋を。小親が知らぬ間に出でて、此処まで来つ。

イ 星は降る如し。あなやと見れば、対岸なる山の腰に一ツ消えて、峰の松の姿見えつ。われは流に沿うたりき。（前掲D）

ウ …長き橋の欄干低く眺めらる。板の色白く、てら〳〵と対なる岸に懸りたり。（前掲）

エ わが心は決らで、とかうして其の橋の袂まで来りたり。ついでなればと思ひて渡りぬ。（以上「峰の堂」一）

オ いま少し、いま少し、仮小屋と広岡の家と楓の樹と、三ツともにある処に、いま少し、少しにても遠く隔りたらば、心の悩ましさ忘られむ。

渡り越せば、仮小屋とハヤ川一ツ隔たりたり。麓路は堤防とならびて、小家四五軒、蒼白きこの夜の色に、氷のなかに凍てたるが、透せば見ゆるにさも似たり。月は峰の松の後になりぬ。

坂道にのぼりかけつ。頂にいたりて超然として一眸のもとに瞰下さば、わが心高きに居て、ものよく決むるを得べしと思ひて、峰にのぼらむとしたるなり。（前掲E。以上「峰の堂」二）

貢の苦悩はアの二重傍線部に明示されている。お雪の継母にそそのかされて迷うにしても、お雪を救い出すのに小親を利用するという選択肢が、さすがに大人の分別とは思われないし、かといってこのまま小親の手元で楽しく暮らし、子供であり続けてよいわけはない。物語前半の八年前が五六歳の幼児であったとすれば、八年後の今は十三四歳の貢である。答えが出せない問題を、ここに至りようやく抱えて、小親の眠る仮小屋を去る行動が先に立ったと理解される。

手をこまねいて夜半の道を行く貢は山の手の大通りに出て、いつしか川の流れに沿うて対岸の「峰の松」に引き寄せられるように「橋」の袂まで来る。「しづかに考へ決む」（ア）と仮小屋を出たのに、ここまで「わが心は決らで」、貢は道順のままに「橋」を渡る（エ）。渡る時、欄干に枕して眠る露天の娘たちを見て、「小親も寝たらむ」と思い、「一足立ち戻り」はした。耳に残るお雪の悲鳴もよみがえる。「いま少し」、まずは「いま少し」、二人の女から距離を置いて、心の悩ましさを薄めなければ、「しづかに考へ決む」ことはできない（オ）。巣立ちの逡巡は「橋」を渡り、川を隔てることで振り切れる。

渡り越した麓路は「峰の松」に上る坂道に続いている。坂道を上りかけた貢は、物事を超然と見下ろす高い視点を求めていることを

自覚する（オの二重傍線部）。その象徴が「峰の松」であり、変貌の激しい市中と違って、八年経ても変わらずふる里の空に望まれる。

逡巡はもう一度、坂道の曲がり角（帰厚坂から千杵坂へ右折する角）で激しく揺り戻す。そこに立つ「艶子之墓」が、継母に疎まれた艶子の境遇をお雪の身の上に重ねて思い出させる。思わず歩みを止めた貢は、強く胸を打つ叫びを聞いて、ここでは立っていられなくなる。草に坐して耳を傾けると、「さま〴〵のこと聞えて、ものの音響き渡る」。貢の頭脳を苦しめる音響は、目を閉じて静かにしていることで、その落ち着きのなかでしばし止み、取って代わるように清らかな謡の声が頭上の峰の方から聞こえてくる。貢はこの声に力を得て立ち上がり、頭上の峰への坂道を再び上り始める。石段三十五階を上ると、そこは「彼の峰のある処、日暮の丘」であった（前掲F）。

この時聞こえた謡が〈松風〉である意味を、先行研究では〈松風〉の内容を『照葉狂言』に重ねて説明する傾向が見て取れる。代表的な見解を二点引いてみる（注36）。

…須磨浦の汐汲女松風と村雨の姉妹が在原行平をいちずに慕う、すなわちふたりの女がひとりの男を恋い慕う主題の作品。謡曲「松風」が聞こえたについては、作者内部に意図するところがあったと察せられる。（頭注九）／…この行平が、ふたりの少女を置いて去ったという物語から、啓示を与えられ、小親もお雪も置いて去る決意をするととれる。（補注一五三）（日本近代文学大系7『泉鏡花集』）

…在原行平を愛する松風・村雨という姉妹の海女の恋慕の情を主題とする曲。美しい秋の月夜、松の木にすがって思いにむせぶ「松風」の曲がこの物語の終末に最もふさわしいものとして選ばれたことは言うまでもない。以後の鏡花作品でも最も多用される能である。（新日本古典文学大系明治編20『泉鏡花集』頭注二）

注意すべきは、貢は謡の声を聞いて、それが〈松風〉の謡であると理解しても、詞章の意味（近代大系にいう「物語」）に反応したわけではない。その声の清らかさ、妙なる音調に心惹かれたことが、従来の研究では見落とされているようである。貢はこれほどの謡の声を小親以外にまだ聞き知らない。仮小屋に囲われた幼く狭い経験では、きびしい覚悟で「謡の道修する」人々が他にいるとは想像できないのも当然であろう。石段三十五階の坂道は、貢が大人の芸の世界とその広さに目を開く、入り口への最後の階段であるといえる。仮小屋を出た貢は、未知の世界への入り口を求めてここに到達したのである。

〈松風〉の謡を聞いた貢が、もしもその「物語」を想起して、捨てられた女たちのむせぶ思いを脳裏に描いたら、それでも女たちを捨てる決断ができたであろうか。むしろ貢の胸を打つ叫びは鋭さを増し、様々な音響に襲われた貢が再起するとは思えない。貢は「物語」から啓示を与えられたのではなく、清らかな謡の声に救われて、静かに大人への一歩を踏み出す覚悟を得たと考えられる。

その場所、日暮の丘の「峰の松」には注連縄が張られ、香を焚く箱が置かれていた。古びた本堂の傍らに畳を敷いて、麻の裃を着けた四五人が扇子を控えて、〈松風〉の謡を謡っている。その声は風に

そよぐ松の梢に聞こえ、松の梢には松を吹く風の音（松籟・松濤）もしている。そして、尼が一人釜に湯を立てて薄茶の点前をしている。茶の湯の釜にたぎる音もまた、松風にたとえられる（注37）。

「艶子之墓」のある坂道の曲がり角で貢が聞いた「さま〴〵のこと」、「ものの音」を静めてくれた〈松風〉の謡の声は、その源を頭上の「峰の松」の在りかに尋ねてみると、そこには種々の〝松風〟が交響して、静謐な時間が流れていた。

曲がり角の草に坐す貢は、そこではまだ、

ひそかに見ばや、小親を置きて世に誰かまたこの音の調をなし得るものぞ。（「峰の堂」二）

と、仮小屋に眠るはずの小親の声を聞くかと不審に思っている。小親でないとすればいったいだれが、夜更けの峰で謡うのか。峰の堂で謡の声の主を確かめた貢は、

謡の道修するには、かゝることもするものなり。覚えあれば、

跫音立てて此の静さ損なはじと、忍びて退きぬ。（同前）

と、小親以外にも世間にはこの音調をなす者が当たり前にいると初めて知る。謡の道の修行にここまでする者が、山を越える貢の行く手には、どれだけいることであろう。どういう山を越えるか、――芸で身を立てるか、別の道を選ぶかは、まだ分からなくてよい。今の貢にしなければならないと、この場所で自覚されたのは、どういう山であれ、「いでさらば山を越えてわれ行かむ。」と、襟を正してお雪に聞かせる言葉を発することであった。

襟を正して訣別の言葉を発する貢は、その前に〝松風〟の交響する場所の静かさを自分の跫音で損なうまいと、忍び足で山の端へ移動する。峰の堂に集う人々が大切にする静かで清らかな世界を、貢は自分でも大切にしたいと思われた。貢が大切に思い、貢を大切に思ってくれたお雪や小親がいる世界、麓の川の下流にある小路にとどまったのでは、お雪を救えないばかりか、恐らく小親や貢の将来にもためにならない。小親と別れる悲しさは、お雪を救えない報いであるというほどに深いが、今の貢にはお雪を救う力がないと見切れたことは、小親の芸を超然の高みから見下ろせたことと同時にある。

注

（1）引用は『金沢古蹟志（下）』（歴史図書社、一九七六年一二月）による。

（2）拙稿「近代（安宅）論議と地域伝承史―「鳴るは滝」名所化への視線―」（『金沢大学文学部論集言語・文学篇』二六、二〇〇六年三月）参照。

（3）『石川県大百科事典』（北國新聞社、一九九三年八月）・藤島秀隆・根岸茂夫監修『金沢城下町社寺信仰と都市のにぎわい』（北國新聞社、二〇〇四年六月）などによる。

（4）『城下町金沢の人々』（石川県立歴史博物館、一九九九年一〇月）所掲。

（5）『金沢市史資料編18絵図・地図』（金沢市、一九九九年三月）別刷24

による。

(6) 『金沢市史資料編18絵図・地図』別刷56による。

(7) 『金沢市史資料編18絵図・地図』口絵四七頁による。

(8) 日置謙『加能郷土辞彙』(改訂増補復刻三版(北国新聞社、一九八三年三月)による)には、「金沢の街端卯辰山の幽谷で、昔は鶯の名所であつたからの称である。明治以降此の辺を鶯街といふ。」と記す。これより早く『金沢古蹟志』には、「此の地は昔は卯辰山の幽谷にて、鶯の名所なりと。故に鶯谷と呼べり。いにしへ幽谷なりし頃よりの風致の体にて、幽閑の地なるにより、春季は殊に鶯声他所に増れりとぞ。」(「鶯谷」の項)、「此の町名は、元禄九年の肝煎裁許附等の書類に所見なし。後に呼び初めたるにや。彼の鶯谷の旧称に拠りて鶯町と称せしもの也。」(「鶯町」の項)と記す。さらに、後述する『卯辰山開拓録』には、「子来坂のうしろを鶯谷と云」とある。

(9) 日本近代文学大系7『泉鏡花集』(角川書店、一九七〇年一一月)補注一三七に「この墓が市役所の手で改葬されるさいに作られたもの。」とある。

(10) 蒲生欣一郎『もうひとりの泉鏡花』(東美産業企画、一九六五年一二月)。

(11) 小林輝冶「故郷の「記憶」—鏡花の原風景を探る」(『鏡花』(泉鏡花記念館、二〇〇九年三月))。

(12) (11)に同じ。

(13) 秋山稔「鏡花文学注釈覚書—『義血侠血』『凱旋祭』『清心庵』—」(『日本文学研究年誌』四、一九九五年三月)では、『照葉狂言』発表の前年(『清心庵』の前々年)に当たる明治二八年の『北国新聞』に二度、卯辰山の麓に住み、茶を楽しむという清心尼の記事が載り、庵の位置を一度目は「卯辰山の麓」、二度目は「卯辰山の半腹」と記している。なお、新大系補注一四は『鶯花径』に出る「鶯谿の尼寺」と『照葉狂言』の「尼の庵」を共に清心庵と見ているが、『鶯花径』の「鶯谿の尼寺」については、同一視できないと思われる。

(14) 金沢市立玉川図書館蔵。『太陽コレクション城下町古地図散歩1』(平凡社、一九九五年八月)・『別冊太陽167泉鏡花 美と幻影の魔術師』(平凡社、二〇一〇年三月)所掲。

(15) 善妙寺の立て札に「慶応三年、加賀藩主斉泰が卯辰山開発の折に、庚申塚土中より、日月天子像が出現した。藩主これを立像寺・日教上人に託し、祭祀させたのが当寺のはじまりである。」と記す。また、同立て札の続文には「大正一〇年(一九二一)に市の卯辰山公園聖地計画により、約二丁下った現在地に移転。」と記す。『金沢古蹟志』には「庚申塚来歴」の項に「近く慶応三年卯辰山を平均せし時、庚申塚の土中より仏像を掘り出せり。昔庚申堂の此の地に存在せし頃の遺仏ならんか。或は云ふ。此の仏像は従前城中広式向より故ありて埋め置ける像にて、古仏に非ずともいへり。」とある。さらに、後述する『卯辰山開拓録』の「庚申塚旧跡」の項には「○出現石仏　この石仏は開拓のとき土中より掘出せし大日如来を彫こみし石仏にて石のほこら并小

堂あり塔婆は今感応寺墓所の側らに移せり」とある。

(16) 前掲『鏡花』及び『別冊太陽』所掲の写真による。

(17) 『金沢市史資料編18絵図・地図』別刷8による。

(18) 『稿本金沢市史市街編第一』によれば招魂社の建立も卯辰神社のそれと同時期のように読めるが、『金沢古蹟志』によれば前者は明治三年のことらしい（同書所掲「卯辰山招魂社碑文」参照）。

(19) (13)の秋山論文。

(20) 宮下和幸「幕末維新期加賀藩卯辰山開拓に関する一考察」（『北陸史学』五四、二〇〇五年一二月）には、明治二年一二月に藩預かりとなった肥前浦上村のキリシタンを卯辰山の湯治所等に収容し、そこへの立ち入りが禁止されたことや、明治三年二月以後の養生所の改称（「貧院」）・移転（「医学館」）、撫育所からの出所者多数などを衰退の原因に数えている。

(21) 開拓山人内藤誠斎の経歴と任務については、山森稿に『金沢教育史稿』（石川県教育会金沢支会、大正八年四月）を引く。また、(20)の宮下論文に「先祖由緒并一類帳」などを引いて詳述する。

(22) 高澤裕一「幕末期の金沢町における救恤」（二宮哲雄編『金沢—伝統・再生・アメニティ』〈お茶の水書房、一九九一年二月〉）、清水隆久「卯辰山養生所をめぐる問題点—御用地史料を中心としての考察—」（『市史かなざわ』五、一九九九年三月）、『金沢市史通史編2近世』（金沢市、二〇〇五年一二月）、徳田寿秋『前田慶寧と幕末維新』（北國新聞社、二〇〇七年一二月）、板垣英治「加賀の西洋医学の系譜」（『北陸医史』三一、二〇〇九年二月）など。また、招魂社については、本康宏史『軍都の慰霊空間—国民統合と戦死者たち—』（吉川弘文館、二〇〇二年三月）に詳述されている。

(23) 『金沢市史資料編13寺社』（金沢市、一九九六年三月）には、「天満宮御神幸御行列略図、卯辰神社御遷宮御祭礼獅子・俄道しるべ、天満宮御祭礼各町獅子・俄番付、等の刷物が当時の熱気を今に伝えている」として、「天満宮御神幸御行列略記」・「御遷宮御祭礼獅子にわかきをんはやし道しるへ」、「天満宮御祭礼ニ付獅子囃俄等」の写真を掲載する。

(24) 横江義雄『金沢の愛宕信仰』（私家版、一九六四年九月）・『卯辰山天満宮覚書』（一九六六年一月）・『豊国神社小史』（奥付なし）参照。

(25) 「養生所并新町建之巻」末尾の西御影町分は犀川大橋下にあるため、『稿本金沢市史』としては「卯辰山」の節にこれを省略するが、卯辰神社「御本社」の項も「飛梅」以下を省略している。必ずしも底本どおりの翻刻がめざされているわけではない。

(26) 高室信一『金沢・町物語』（能登印刷出版部、一九八二年一一月）に、「石室は古代奈良御影で、金沢にある石としては大和石がこれ一つといわれるからまごうことなく謡曲「井筒」の本尊だ。」として、山森稿に紹介する口碑を解説している。

(27) たとえば石川県立能楽堂後庭の石作りの井筒（一九七九年設置）が思い起こされ、金沢大学角間キャンパスにも移転当初（一九八九年）から石作りの井筒が設置されている。

(28) 加賀藩随一の豪商木谷藤右衛門家四代の子が別家木屋孫太郎家の祖となる。木谷藤右衛門とその一族については、『金沢市史資

料編8近世六』（金沢市、一九九七年三月）に総説と大量の文書が掲載されている。

(29) 杉原稿では「卯辰神社一の鳥居前に古ひたる井筒あり。」としている。一の鳥居は帰厚坂の入り口にあり、景雲台にある御本社の鳥居は石鳥居と呼ばれる。杉原稿には両者の混同があるのかも知れない。

(30) 山本登朗「謡曲「井筒」の背景―櫟本の業平伝説――」（『説話論集第十五集芸能と説話』（清文堂出版、二〇〇六年一月）に「能から伊勢物語注釈への影響」を指摘する。

(31) 『和州旧跡幽考』に藤原為子の『玉葉集』入集歌を挙げる。また、山本登朗「謡曲「井筒」を生み出したもの」（『能と狂言』9、二〇一一年四月）に、平安末期の歌人、殷富門院大輔が業平の住居跡に立ち寄っていること（久保田淳説）が紹介されている。

(32) 『大和・紀伊寺院神社大事典』（平凡社、一九九七年四月）、天野文雄「在原寺は「廃墟」にあらず」（『能苑逍遙（上）世阿弥を歩く』（大阪大学出版会、二〇〇九年三月）、(30)(31)の山本論文参照。

(33) 『卯辰山開拓録』に帰厚坂を表往来、卯辰八幡社方面から養生所へ上る子来坂を横往来と称している。

(34) 鈴木忠侯『一挙博覧』（寛政二年（一七九〇）刊。『日本随筆大成』新装版第二期第八巻（吉川弘文館、一九九四年九月）所収）には、河内国壺井八幡の井筒は石で作られ、仏像を彫り付けてあるとする。

(35) 『市史かなざわ』五（一九九九年三月）の表紙写真解説（本康宏史）参照。表紙は明治三〇年九月、近廣堂発行の「金沢名所」（石川県立歴史博物館蔵）の内、「浅野川大橋から向山を望む」図。

(36) ほかに手塚昌行「泉鏡花『照葉狂言』成立考」（『日本近代文学』一二、一九七〇年五月）、藤澤秀幸「泉鏡花『照葉狂言』――残酷な美の世界――」（『国文学解釈と鑑賞』五七・五、一九九二年五月）、野山嘉正「近代小説新考 明治の青春――泉鏡花「照葉狂言」（その五）――」（『国文学』三九・三、一九九四年三月）、谷口佳代子「泉鏡花『照葉狂言』論――その構成と謡曲をめぐって――」（『福岡大学日本語日本文学』九、一九九九年一二月）及び前掲小林弘子論文など。

(37) 『時代別国語大辞典室町時代編』（三省堂）は『玉塵』の例を、また『日本国語大辞典第二版』（小学館）は川端康成『雪国』の例を載せている。

〔付記〕本稿は「平成二十五年度科学研究補助金（基盤研究C）近代宝生流能楽史の地方展開」による研究成果の一部である。また、「文化資源としての金沢・卯辰山――その明治維新期を『卯辰山開拓録』から見る――」と題して、二〇一二年一〇月一七日に金沢大学人間社会研究域国際文化資源学研究センターの研究例会で口頭発表した折の考察を発展させたものである。席上、種々有益な御示唆をいただいた方々に感謝申し上げる。